

## 参考資料1

科学技術・学術審議会 学術分科会 研究環境基盤部会  
共同利用・共同研究拠点及び国際共同利用・共同研究拠点  
に関する作業部会  
(第10期-第7回)R2.7.22

### 前回・第6回作業部会における主な意見等 (ネットワーク型共同利用・共同研究拠点関係)

- 最近ネットワークによらなければ実施できない研究も出てきている。例えば、天文学における新たな動向として、重力波やニュートリノ観測など突発的に発生し観察可能な場所が限られる事象について、特色ある多くの観察所の協力により観測することで、新たな発見や知見を得られるものがあり、ネットワークが非常に重要になってきている。
- 新型コロナウイルスの感染拡大は、今後の学問、学術研究の進め方に大きな影響を与えていくだろう。これまで活発に行われてきた国内外の研究者の交流が、サイバーな方法への移行も含めて、今後どのように進んでいくか注目する必要がある。
- 装置を利用して得られた研究データの活用や、データのシェアに係る体制構築が重要になってくる中で、研究者コミュニティを支える仕組みとして、ネットワーク型拠点には大きな可能性があり、重要性はさらに高まる。
- ネットワーク型拠点の重要性が認識されているにもかかわらず、現状6拠点の認定にとどまっている。ネットワーク型拠点の形成に向けて、ボトルネックとなっている課題や、ネットワークによるインセンティブの付与について、議論する必要がある。
- 認定拠点の全体数をむやみに増やさないと考えた考えに立つとするならば、そういった観点からも、ネットワーク型拠点は必要。
- ネットワーク型拠点形成によりコミュニティに対して情報共有が進むことで、共同研究の申し込み先が分かりやすくなり、利用がしやすくなるといった利点もある。
- 単独で拠点になることができるような大規模な研究施設だけでなく、小規模でもクオリティーが高い研究施設もネットワークに加わることができることが、本来のネットワークと考える。

- ネットワークを組もうとするとコミュニケーションのコストが非常にかかるので、例えば、研究施設間の調整をする人員の人件費を措置することで、ネットワーク型拠点制度の発展につながるのではないかと。
- 現在、拠点認定はされていないがポテンシャルはある、いくつかの研究施設を想定して考えると、拠点の申請・認定の前に柔軟に、お試しプログラム期間を設けたり、時限付きでソフトプログラムを設けたりすることを通じて、学術的な経験を積むことは各研究施設にも財産になる。
- ネットワーク型拠点の認定基準を明確化することは重要。
- ネットワークを組む際、主たる拠点には十分な実績等の要件が必要だが、連携する研究施設は少し要件を緩和することで、ネットワークを組みやすくする方向性も考えられるのではないかと。
- 理系の研究施設において、小規模でも実績のある人文系の研究施設をネットワークに組み込むことで、より研究が発展することも考えられる。
- コミュニティのニーズや分野、研究の方向性等の変化に応じて、ネットワークの参画機関の組み替えが必要となる可能性もあるため、ネットワークの参画機関の柔軟性といった観点も重要。
- 既に認定されている拠点の中にも、似たような分野でネットワークを組みやすいと考えられる拠点もあるので、例えば、小規模な拠点がネットワークを組むことによって研究が活性化する事例など、ネットワークのメリットがより明確になると良い。
- 異分野融合型のネットワーク型拠点には、異分野融合なりの難しさがあると考えられるので、今後、その課題や成果等については、中間評価や期末評価でも注目したい。
- 小規模な研究施設が拠点化する際、一人の卓越した研究者のリーダーシップや研究業績から始まって、新しい学術領域を組織化して作っていくケースが多くある。ネットワーク型拠点の形成が、こうした学問が成長する重要なきっかけを後押しすることもあり、有効な点と言える。